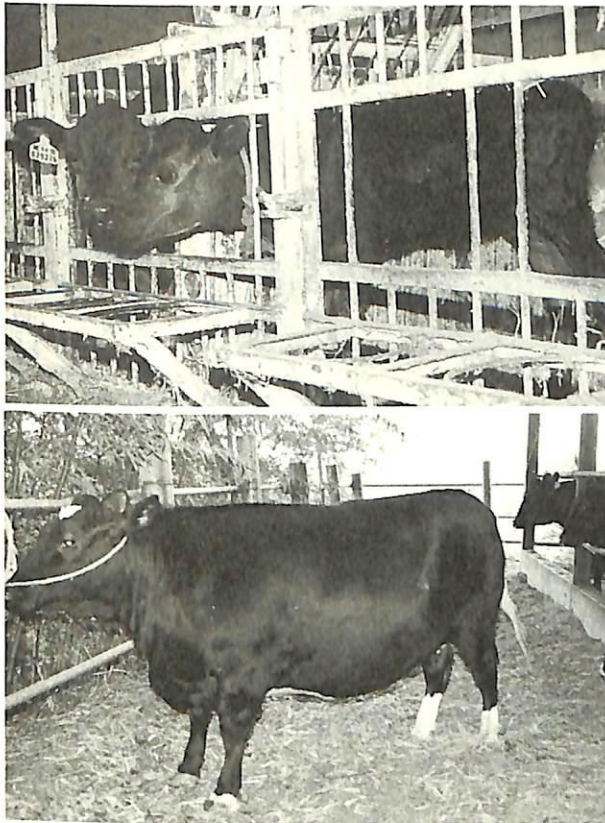


九 交雑種（見島牛F1）スモールの生産実施（平成四年）

昭和四十年代後半は、石油ショック、食料危機といった世界的な経済混乱にあり、日本経済は高度成長から低成長に様変わりした。酪農も、消費の低迷に加えて飼料等生産資材の急騰により打撃を受けた。その回復のため生産者の運動は熾烈なものとなったが、五十年代前半にかけては牛乳乳製品の需要の回復により乳価も上昇し、酪農の専業化、集約化が進むとともに、ミルカーなどの機械の導入が積極的に行われる



見島牛F1（佐藤宏弥牧場で）下=同肥育牛

ことなどにより全国の生乳生産量は大きく伸びた。ために、生乳生産量は需要を上回る伸びを示し、五十三年度末には乳製品の過剰在庫が過去最高の水準となった。このため、需給緩和による生乳価格の低下防止と乳製品在庫の解消、飲用市場の混乱を防ぐため昭和五十四年度には生乳の計画生産制度を導入した。単年度需給を前提とした生産調整であり、昭和六十一年、二年には減産計画を実施した。ところが、需要に

受精卵投与ならびに出産頭数

年度別	平成四年	五	六	七	八	計
受精液 受入数	二〇五	五〇〇		一八六	七〇	九六一
精液 投与数	一四九	二九九	二〇五	一五九	九八	九一〇
精液 破損数		二	一	五		八
出產 頭数	一九	九三	一一五	五四	八八	三六八
弊死 数	一	一三	二九		一	四四
販売 頭数	一〇	七三	一〇七	六二	八五	三三七

見合った生産も需要の変動等から年度途中での修正を繰り返したので、生産者はその皺寄せを受けた。

酪農家は生産枠の中で経営を続ける状況下で、さらに追討ちをかけるように平成三年には牛肉の自由化が進められたので、牛肉価格が値下がりし肥育向け子牛価格も暴落した。

このため、乳子牛の生産と乳肉牛を生産してきた酪農家も肥育牛農家ともに経営は一段と苦しくなってきたので、この危機を打開する方法として人工授精の普及にともない交雑

種牛スモールを生産して酪農肥育牛農家の経営改善を図ることとした。

これは茨城県開拓連の指定した見島牛の種雄牛の精液を組合酪農家が飼養する乳用雌牛に種付けし、産まれたスモールを組合肥育牛農家に提供するほか県開拓連をとおして開拓者の肉牛生産者に素牛として販売するものである。

県開連からまとめて引き取った精液の保管および授精に関する業務は共栄酪農協に委託している。

十 大八洲開拓畜産振興部会の結成（平成元年）

入植以来十数年近く続いた組合員の食料不足も昭和三十年後半から自給した上に農産物の販売高も次第に上昇の兆しが見えはじめたので、四十二年には肉用素豚生産センターの設置、牧野改良事業の実施などの養豚、酪農の規模拡大、経営振興対策をすすめ、肉豚、牛乳の生産の向上を図った。

一方、昭和四十五年に乳牛哺育センターを設置して肥育一貫経営をはじめた乳肉牛の生産も、五十年から販売高を伸ばして、国内の需要の伸びとともに経営農家は生産増強に力を注ぎ、専業経営をようやく確立するにいたった。

ところが、昭和四十六年の豚肉の輸入自由化決定で次第に輸入肉の増加がすすむとともに平成三年には牛肉も自由化さ

れ、畜産品の国際化と全国的規模拡大による供給過剰、消費の低迷で、畜産業は国際自由化の波に経営難の時代をいよいよ迎えるにいたった。

酪農においては原乳の減産計画が進められる中で乳肉牛スモールの価格下落により酪農家の経営も逼迫してきた。

大八洲開拓農協の運営上もつと密接な関係にある畜産組合員がこうした状況において苦闘している経営を立て直し、安定確立を図ることは組合の経営を維持するためにも最大の課題であり、経営を健全化して、畜産農家の所得向上の推進を急務と考え、組合は経営者と協議、検討を進めてきたところである。